
魔王 → 勇者

熊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王↓勇者

【Nコード】

N1023X

【作者名】

熊

【あらすじ】

世界の終焉訪れし時、聖女の祈りにより異界から勇者来りてその終焉を回避する。

そんな伝承が語り継がれてきた世界『ライアンガルド』に、伝承を彷彿とさせる危機が訪れる、魔王の手に寄り緑の野は焼きつくされ、清らかな水は汚泥へと姿を変える。伝承に従い、フリスタ王国王女アリシア・フリスタは勇者降臨の祈りを奉げるのだが、降臨したのは勇者ではなく、まさかの魔王だった。

序章・それは偶然か必然か（前書き）

初めまして熊と申します。

魔王が魔王を倒すという物語、もしもお目にとまりお読みいただければ幸いです。

序章・それは偶然か必然か

「貴方が勇者様でしょうか？」

松明の光以外、まともな明かりの見えない石室の中、聖女を思わせる装いの少女は、魔法陣の中央に佇む青年にそう尋ねる。

本来こういう場合青年は『はい、そうです』か『僕が勇者？』とか、それらしい反応をした方が良いのかもしれない。

だが青年はの言葉にこう答えなければならなかった。

「いいえ違います」

青年は聖少女にはっきりと淀みなく答える。

聖少女は青年の言葉が信じられないとばかりに、目を見開き青年を見つめる。

「で、では」

「聖騎士とか英雄とか救世主でも無いですからね」

聖少女が何か言う前に、青年は言葉を封殺する。

青年は勇者や英雄、救世主とかその手のモノとは縁の無い、寧ろ対局に位置する存在だった。

「僕はイクスフォリア、名前が長いのでみんなは僕をイクスと呼

びますが……まあ、申し訳ないですが僕は魔王です」

第一話

「わ、私は何てものを呼び出して……」

「何てものってそんな……」

「世界の危機だというのに災厄をもう一つ生み出してしまふなんて」

「危機？」

「もうおしまい……おしまいだわ」

聖少女はまるで糸の切れた人形の様にその場に膝から崩れ落ちる、イクスはその様子から軽く自分の置かれた状況を考えてみる。

勇者かと聞かれたから違うと答えたのが不味かったのかもしれない、だが魔王であるイクスが少女に私は勇者ですと嘘をつく義理もない、だから嘘偽りなく答えた。

結果としてそれが少女には受け入れ難いものだったのらしく、イクスの前で涙を流して神よ何よとうわ言の様に呟き続ける。しかし本当に泣きたかったのはイクスの方だったりした。

「とりあえず僕まで世界の災厄みたいな言い方はやめてほしいんですけど……」

この世界に来る前もイクスは世界の災厄と恐れられた。

ただ魔王という存在なだけで。

だがイクスの言葉に少女は憎悪の限りを叩きつけんばかりにイクスを睨みつける。

「だって貴方は魔王なんですよ！」

少女の言うとおり、イクスは魔王だ、少なくとも呼ばれる前の世界では魔王と確かに呼ばれていたし、イクスには自分が魔王だという自覚もあった。

「だからと言ってどうして僕が、この世界を破壊しなければならぬんですか？」

「……え？」

少女は一瞬イクスの言葉に耳を疑った。

魔王とは世界を破壊し人々を殺し、終焉を招く者……少なくとも少女はそう教えられて育ってきた。

しかし少女の目の前にいる魔王は世界を破壊しないばかりか、何故破壊しなければならぬのかと尋ねてくる。

「じゃあなんでここに……」

「そら君が僕をここに呼び出したからでしょうに」

何を聞いてるんだと訝しげな表情を向けるイクスに少女ははたと気づく、この魔王は自分が呼び出したからここにいるのだと。

「僕は望んでここに来たわけではない、君が僕を呼んだからここにいる、つまり君が僕がここにいる理由を一番よく知ってるはずですよ」

少女にとってイクスが魔王か勇者かよりも、自分を世界を救ってくれるのが重要な事を思い出す。

「魔王イクスフォリニア様」

「別にイクスで構いませんよ」

「じゃあイクス」

「はいなんですか？」

「私はフリスタ王国王女アリシア・フリスタ、伝承により世界を終焉から救う勇者を願った」

「その様ですね」

「ですが結果は魔王である貴方を呼び出す事になった……」

アリシアは一度言葉を切り、イクスに視線を向ける。

イクスはアリシアの知る魔王の様な邪悪さは無い、アリシアは意を決し、言葉を口にする。

「お願い、この世界の魔王を倒して世界を救って」

「はい、わかりました」

イクスはアリシアの言葉にあっさり二つ返事で答える。

「本当に？」

「たまには良いんじゃないでしょうかね、魔王が魔王と戦つつてもそうは無いですからね」

そう言つてイクスはアリシアに手を差し伸べる。

アリシアはその手を恐る恐る掴む。

「えっ」

「どうしました？」

「あ、その……温かいなつて」

「一応生きてますからね」

イクスは苦笑しながら手を引いて、アリシアを立たせる。

「それで、どうしますかね？ 魔王というからには僕と同等の力を持つているとは思いますが、まさか無策に突っ込んで行けとか言われそうです？」

「まさか、一度城に戻るわ」

「召喚の成功を民衆に知らしめ、希望を与えて士気を高める為ですかね……ってここは城じゃなかったんですか？」

イクスの言葉にアリシアは驚いた表情を浮かべ、それをすぐに呆れた表情に変えてため息をつく。

「貴方は察しが良いんだか悪いんだか……」

「よく言われてましたねえ」

「よくって……まあいつか」

アリシアは背後にある大きな扉に手を当てる、小さく呪文を囁く。すると扉は淡く輝きゆつくりと開いていく。

「呪文認証による開閉ですか」

イクスはぼんやりとその光景を眺めながら、そういえば魔王の城なんだから鍵の一つもつけると、自分の世界の勇者に怒られたことを思い出す。自分しかないし、盗られて困る物も無いからと腐ってつけなかったが。

開かれた扉の先に広がる世界、高台の上にもあるのか遠くまで見渡せる。

「僕のいた世界とあまり変わらないですね」

「見た目は平穏、だけど実際は魔王の脅威に曝されているわ」

イクスはとてもそう思えなかったが、アリシアの真剣な表情にそうなのだろうと思い直す。

「フリスタ王国はどちらにあるんですかね」

「ああ、あつちよ」

そう言つてある方向を指さしたアリシアの動きが止まる。

遙か彼方、アリシアの指さす先、中央に城を備えた街が見える、それが幾筋もの黒煙をあげていた。

「そ、そんな」

「アリシア、掴まってください」

そう言つとイクスは遠慮もせずアリシアの腰に腕をまわす。

アリシアはイクスの行動に驚き体を震えさせるが、すぐにイクスの言葉に従うことになる。

急転する世界、魔法も何も使わないで至るには不可能な速度、野を駆け森を跳び川を滑る。

「喋ると舌を噛みますよ」

イクスの言葉にアリシアはただ頷く。

遙か彼方に見えていたフリスタの城や街が、あつという間に近づいてくる。

そしてイクスはその目に敵を捉えた。

第二話

【フリスタ王国・城門前】

「さっさと落とせ！」

無骨でありながらも、どこか品のある鎧に身に纏った虎の獣人、ガイ・ランバスは苛立っていた。

ガイは獣人の国ダバロウ帝国の三獣将の一人だ、最近の魔族の勢力の拡大を憂う、皇帝バルド・ダバロウの命により、各国協力を促すためにフリスタ王国を訪れた。

だがフリスタ王国は協力を拒否する。

世界の危機だというのに勝手をするフリスタ王国に、ガイの比較的短い堪忍袋の緒はあっさり切れ、実力行使に出させた。

ちなみにガイがフリスタ王国に出した協力案は。

一つ、人間は獣人に従う事。

二つ、人間は領地の半分ダバロウ帝国へ献上する。

協力というより隷属せよとしか聞こえない内容。

「我らは人間どもより優れている、優れた者に劣る者が従うのが当然と、何故奴らはわからないのだ」

獣人至上主義のガイが、人間と協力という言葉を書解した結果だった。

「じゃあ従ってもらいますかね」

「何っ」

ガイが言い終える前に、ガイは体を大地に伏していた。
「強い者には従うんでしょう」

ガイの前にはフリスタ王国王女のアリシア片手に抱き、静かに微笑む黒い外套を身に纏った青年がいた。

「貴様……何をした」

ガイは自分に気付かれず、更には自分を大地に伏させたであろう青年に殺気を向ける、並の人間なら恐怖に腰が砕けるだろう。

「吼えるな猫が」

だが青年は恐怖を感じた様子も見せず、逆にガイは再び地面に伏す事になる、今度は地面にめり込む程に。

ガイはそこで気付かされる、青年は物理的には何もせず、ただ威圧感のみで自分を地面に伏している事に。

「今すぐこの場から去れ」

拒否も質問も許さない圧倒的命令、ガイもガイの部下である獣人

の兵士たちも、まるで自国の王の命令を聞いたように逃げ出す。

体を動かしていたのは頭ではなく、死にたくないという生存本能だった事を気付くのは青年の視界から逃げきってからだった。

「イクス……」

アリシアが不安げにイクスを見上げる、そんなアリシアにイクスは無邪気に微笑み。「僕は魔王であって勇者なんかじゃない、ただ僕は君を救う、約束はしましたからね」

【フリスタ王国・フリスタ城謁見の間】

「そ、それでそなたが三獣将を退けてくれたのだな」

「まあ、そうですねえ」

「そ、そうかそれには感謝する」

「勿体ないお言葉で」

イクスはそう言いゆったりとした動きで一礼し。

「それよりもフリスタ王」

「な、なになにかな」

「別に何もしないので、いい加減玉座の後ろから出てきてもらえま

せんか？」

イクスは呆れた様子でフリスタ王、アルバート・フリスタを見てから周りを見渡す。

衛兵たちは逃げ出したそうに足を震わせ、大臣は泡を吹いて倒れ、王は豪華な玉座の裏に隠れる、王妃だけが微笑みイクスを見ている。

「アリシア、フリスタ王国っていつもこんな感じなんですか？」

イクスは自分の傍らでこめかみに人差し指を当て、軽く唸りながら悩むアリシアに聞く。

「そうだとしたらどれだけ国として脆弱なの、イクスが自分の名を名乗った時に何て言っただかしら？」

「お初にお目にかかります。貴国の王女、アリシア・フリスタの願いにより呼び出された『魔王』イクスフォリニアです」

一瞬その場が凍り付く。

「この世界では『魔王』は恐怖の最たる象徴なの、イクスが思う以上にイクスは恐れられているのよ」

「そういうもんですか、その割にアリシアは僕を恐れて無いですね」

「この世界の『魔王』を倒してくれるんでしょう？ ダバロウの獣人たちもお願い通り傷つけずに追い返してくれたし、これでまだ疑っ

ていたら一国の王女として、イクスの召喚者として、イクスに失礼でしょ？」

イクスはガイたちを捕捉した瞬間、遠距離からの攻撃で一気に潰す気だった。

しかしそうする直前に、アリシアから出来る限り傷つけないで欲しいと頼まれる。

「駄目なんですか？」

「駄目じゃないけど、傷つけない方が色々都合が良いのよ」

結果、凶悪な殺気を叩きつけて追い返すに至った。

「ともかくお父様、フリスタの代表は彼です。確かに魔王だけど世界を救ってくれると約束してくれました」

「そ、そうではあるが……」

「良いではないですか」

話をまとめようとするアリシアと踏ん切りのつかないアルバート、そんな平行線を見かねてなのか、口を開いたのは王妃、エルシア・フリスタだった。

「イクスフォリニア様」

「イクスで構いませんよ」

「ではイクス様、単刀直入にお伺いします。貴方は娘のアリシアを助け、魔王を打倒してくださいますか？」

「ええやりますよ。アリシアと約束しましたからね」

臆する事無く、イクスはエルシアの眼差しを真正面から受けて言いきる。

『ライアンガルド』における魔王とは絶対恐怖の象徴、普通の人間ならば倒せるかと聞かれてもわからない、無理と答えるのが通常だ、だがイクスは魔王であり、異世界から来たからこそ簡単に言い切れた。

エルシアは十秒ほどイクスを見つめていたが、顔に微笑みを浮かべ。

「ではお願い致しますね」

「え、エルシア！」

アルバートがエルシアに何か言おうとする、だがエルシアはそれを手で制する。

「言葉で言い合っていても解決を招きません。受け入れ信じる事も必要ですよ。ねえ皆さん」

全てはエルシアの言葉で終わった。

誰も異論を唱える事もなく、フリスタは『魔王』を受け入れる事になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1023x/>

魔王→勇者

2011年10月21日13時07分発行